

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 石井 溥 印

学位申請者：小牧幸代

論文名：「北インド・ムスリム社会におけるサイヤドの人類学的研究」

論文の概要

小牧幸代氏の博士学位請求論文は、北インド・ムスリム社会におけるフィールドワークに基づき、預言者の「子孫」とされるサイヤドの人々に焦点を合わせ、ヒエラルキーの問題を考究した研究である。インドのムスリム社会は従来「ムスリム・カースト」論として分析されることが多かったが、本論文はそれを批判的に検討し、ムスリムの人々自身の考えを探る視点を取る。そして預言者の「子孫」に高い地位を与える社会的態度は、預言者ムハンマドに対する崇敬の念の表現であることを示す。また、親族、婚姻、贈与などに注目し、預言者とその子孫等に賦与されているバラカ（神に起源する祝福の力）の移動を分析する。執筆者はそれに関わる諸関係を詳細な調査に基づいて記述するとともに、それらがイスラーム的論理で説明され得ることを示した。本論文は明確な問題意識と丹念なフィールドワークに基づき、新しい視角からの分析を提示した民族誌的研究である。

論文の内容

本論文は8章からなる。第1章「序論」は、「人類学的サイヤド研究の射程」、「『ムスリム・カースト』論再考」、「現地調査について」等を含むが、中心は「『ムスリム・カースト』論再考」である。そこでは、英領期の植民地人類学、分離独立後の人類学的研究、特に、G. Ansari, F. Barth, L. Dumont, M. Gaborieau, E. Leach, I. Ahmad, S. Dale, W. Crooke, S. Vatuk, F.S. Fanselow, E. Mann, 森本一夫等の研究が批判的に検討されるとともに、E.L. Peters, E. Gellner, A.S. Bujra 等のインド以外のムスリム地域社会研究やD.F. Eickelman, G.S. Colin, C. Geertz, B.S. Turner等の理論的研究も参照され、そこから以下のような分析視角が提示される。①ムスリムの間でのヒエラルキーは、ヒンドゥー的な現象と捉えられてきたが、サイヤドの位置づけに注目すると、「イスラーム的」な現象として再定義される必要がある。②イスラームが掲げる平等主義は預言者をも例外としないが、神に起源するバラカによって一部の同胞（預言者とその家族・子孫、そして聖者）は特殊な役割を果たす人間へと変容させられており、それがヒエラルキーを生み出す要因となっているのではないかと考察される。

以下の諸章では、上記の観点から、サイヤドの特殊な位置づけと役割が分析される。具体的分析対象は、非サイヤドとの間の地位、職業、贈与をめぐる関係であり、その中でサイヤドの地位・役割がどのように意識され表現されているかが考察される。

第2章は、調査地（C町）の概要説明の章で、特定の家系に属するサイヤドが、地域の政治経済、空間配置、言語文化などの領域において、支配的で中心的な位置を占めることが示される。

第3章ではC町のムスリム社会の構成が考察され、ムスリム社会が二分されたうえで細分化されている様子が紹介される。それらは、「外国起源」を主張する高位の3つのカテゴリー（＝ザート）と、インド起源の改宗者とされる低位の19の職能集団（＝ビラダリー）である。ここでは、サイヤドを頂点とし、同胞を序列化する階層的なムスリム社会が描写される一方で、「不浄」な職業に従事する「不可触民」をヒンドゥー社

会から借用することによって、ムスリム間での基本的な平等意識が保たれていることが指摘される。

第4章では、ザート／ビラーダリーの序列と差異をめぐる言説と社会慣行が考察される。具体的には、二項対立的な民俗語彙、境界を維持する社会慣行、差異が意識される婚姻慣行の相違が扱われ、ザートとビラーダリーが社会生活の様々な場面で序列と差異をともなっていて区分されることが明らかにされる。

第5章第1節では、ムスリムの間でのカテゴリー／集団の名称変更が目新しい現象ではないことが指摘されたのち、ザートの名称とその由来、およびビラーダリー・ムスリムの諸グループの名称変更とその由来が逐一記述される。そして第2節では、ビラーダリーの中の現在「サイフィー」と呼ばれるグループが取り上げられ、その経済的上昇とそれに続く「模倣」をとおしての地位上昇戦略が分析される。すなわち、鍛冶屋、大工、石工を「伝統的」職業としてきたこの人々は、1970年代以降、サトウキビ産業の興隆のなか、機械製造により財産を形成したが、彼らは子弟に教育を受けさせ政治にも進出しようとしただけでなく、宗教的寄進やパルダの励行、あるいは花嫁持参財の高騰化・誇示等の慣行を採用し、威信・名誉の獲得の努力を行っている。執筆者は彼らの新しい行動をザートの諸慣行の「模倣」と捉えるが、同時に、そこでサイヤドが「模倣」の標的とならない様子も示す。そしてそれにより、サイヤドと非サイヤドの間の境界線を浮かび上がらせるのである。

第6章第1節では、「聖者の子孫たち」、「地主」、「町長の家系」と呼ばれる特定のサイヤド一族の来歴と系譜書が分析され、第2節では、彼らの婚姻パターンがさまざまな具体例をとおして考察される。婚姻形態の分析は、類別的な父方平行イトコ婚（理念的には一族内婚の事例の大部分を覆い尽くす）、上昇婚と下降婚（前者に高い価値が置かれる）、さらには複婚や近年の配偶者の「公募」の慣行におよぶ。そしてそれらをとおしてバラカの継承ラインである「名誉ある血統」が維持されてきたことが示される。またそこでは、スンナ派とシーア派という宗派の違いに由来するサイヤド観の違いも指摘される。

第7章では、サイヤドと非サイヤドの間での贈与をめぐる関係が分析される。これは、使用人への贈与、ヒンドゥー清掃女性への贈与、聖者祭を含む祭りや結婚式、人生儀礼での食事の授受や役割と贈与、困窮者・物乞い等への贈与、等々の具体的場面について分析され、「助ける」ことと「与える」ことを「義務」と考えるサイヤドは、一方的な贈与者であることを理想とし実践していると結論づけられる。一方、サイヤドが受贈者となる点にも注意が向けられ、サイヤド、また聖者への贈与が、他とは異なるそれぞれの名前で呼ばれるというレトリックが考察される。執筆者はこの関連で、聖者という職業と「サイヤドの義務」の間の矛盾を分析し、一方的な贈与者としてのサイヤドのセルフ・イメージは、聖者廟での儀礼的役割に対する贈与の受け取りさえ拒むまでに達するとする。サイヤドは血統によって生来的に聖者であり、「顕在的聖者」として働かない人々でも、その宗教的義務は、一方的な贈与を通じてバラカを与えることによって果たされるのである。全体として明らかにされるのは、バラカの贈与者としてのサイヤドの特殊な役割である。

第8章の結論では、事例の整理がなされた後、主に以下の諸点が指摘される。

- ・一般ムスリムにとって、サイヤドは、聖者(=「顕在的聖者」)のような非日常的な存在というよりも、自分たちと同じ日常的な存在でありながら、血統によって明確に区別された特別な存在(=「潜在的聖者」)である。
- ・サイヤドは、バラカを過去・現在・未来に伝える「名誉ある血統」の保持者であり、一般ムスリムと神とを架橋する媒介的存在である。その背後には、預言者への崇敬の念、その「子孫」たるサイヤドへの敬愛の念が作用している。
- ・預言者に対する崇敬の念は、ムスリム共同体の統合要素のひとつである。これは多

くのムスリム社会に共通して見られるより「普遍的」な現象であるが、北インド・ムスリム社会では、サイヤドを頂点とした位階制やサイヤドとの間の婚姻や贈与をめぐる関係によって表現されている。

・これまで「ヒンドゥー的」・「非イスラーム的」とされてきた現象は、預言者との関連が主張される限りにおいては「イスラーム的」なものとして論じられ得る。

論文の評価

執筆者はインドのムスリム社会を、従来の「ムスリム・カースト」論からの視角を否定しつつ、ムスリム自身が抱く観念に注目し分析する。調査対象の人々の語り、行動の観察や質問票等による調査に基づいた資料は、信頼するに足り、論文の構成、分析も堅実で、当該社会の人々の生活と観念世界がよく描かれ分析されている。

分析の焦点は預言者の「子孫」、「名誉ある血統」の保持者であるサイヤドであるが、調査はサイヤド以外のグループやヒンドゥーの人々、また主フィールドであるC町のみならず関係諸地域にも及んでおり、それらとの対比においてサイヤドの存在と論理が浮き彫りにされる。また本論文は、ムスリムを多数派とし、ある程度の規模をもった伝統的な町（カスバ）の民族誌として、北インドのみならず、世界的にみても希少かつ貴重なものとなっている。

本研究の中心は、バラカの保持者であり伝え手であるサイヤドが、バラカをどのように伝達し、それをとおして、みずからのグループ内、および他のグループとの関係をどう構築しているかにある。執筆者はこれをサイヤド自体の親族関係、婚姻、贈与などの詳細な分析のみならず、他グループの地位上昇の分析からも明らかにする。これにより本論文は記述・分析の幅と奥行を増している。また、階層的なムスリム社会が「不浄」な職業に従事する「不可触民」をヒンドゥー社会から借用することで、自らの基本的な平等意識を保っているとの指摘も興味深い。

全体として本論文では、バラカの保持・伝達者であるサイヤドを中心に当該ムスリム社会が「イスラーム的」なものとして捉え得ることが説得性をもって論じられている。その分析は様々な議論を批判的に検討した上で、対象に添いつつイスラームの論理から理解しようとする姿勢でなされ、新しい視角からの切り込みに成功している。

公開審査の概要

学位請求者と審査委員の質疑応答の概略は以下の通りである。

まず評価すべき点として審査委員から、本論文が、「ムスリム・カースト論に対抗する野心的論文になっている」こと、「インド・ムスリム民族誌として価値があるのみでなく国際的にも貴重な貢献である」こと、「サイイド、シャリーフ論、イスラーム社会論としても興味深い」点、「綿密かつ網羅的なフィールドワークの成果に基づく研究である」こと、そして「博士論文は全体が物語・世界を構成しているべきものだが、それができている」こと等が指摘された。

質疑においては、まず、論文において扱われている社会がA～Dのランクに分けられているが、その基準はなにか、分類は調査者のものか相手の人々のものか、との質問があった。これに対し、分類は現地の人々のものであること、B、Cに相当する民俗語彙はないが、現地の人々の説明からそのように分けることが可能になる等の返答があり、恣意的な分類ではないことがみてとれた。また、留保制についての質問への答えからは、学位請求者が局限された調査地に関してのみでなく、州や中央レベルの政治にまで目を配った調査研究を行ってきたことが窺えた。

一方、イスラームによって地位を説明しようという点に関しては、それを読み解くのは誰か、またこの説明の傾向は近代的な新しいことではないか、という質問が複数の委員からなされた。これに対しては、説明に際して現地の人々は必ず預言者と結び

つけて話すとの指摘がなされるとともに、基本的には学位請求者自身が解釈し直して読み解いている、との回答がなされたが、そこからは、現地の人々の意識の変化までは考察が届いていないことも窺えた。方法的には困難な面を含むであろうが、現地の人々の考え方の変化を追跡する方向の研究は、大いに進める価値があるというのが審査委員の大方の意見であった。

論文中の『ヒエラルキーは「イスラームの土着化」よりもむしろ「土着」的なものの「イスラーム化」として再定義される必要がある』との主張に関し、前者を全否定する必要はなく両方とも考慮する必要があるとの質問に対しては、バラモンのものなものであれ、預言者と関係づけられる限りではイスラーム的と解されるとの自説擁護の答えがなされたが、これについては、別の委員から、レベルの異なる事項が同列に扱われており、分けて考える必要があるとの指摘があった。

論文中で重要な部分をなす、「ピラーダリー・ムスリムの地位上昇の運動」の章に関しては、記述が錯綜しているとの指摘とともに、「パルダ」や「持参財の展示」を執筆者が「最も重要」とする根拠が問われたが、それらに対しては、それを説明する意識的な書き込みが必要であったかもしれないとの返答がなされた。

また不浄観に関し、本論文ではヒンドゥー的なものとして書かれているが、それさえイスラーム法学的概念で説明できるのではないか、それにより本論文はさらに徹底するのではないかととの質問があり、確かにその方向で考えることは有意義かも知れないとの返答がなされた。

その他の問題点として、バラカの移動や論じられる文脈について議論を深めるべきこと、特定の用語（たとえば haq）の用法・意味内容の更なる検討の必要性、歴史的な面に言及する場合により慎重であるべきこと、本論文で焦点を当てられている社会層以外の記述も望まれること等も指摘された。その多くは、今後の課題として念頭におき、また深化・議論されていくべき点と考えられる。

全体としては、質疑に対する応答は真剣なものであり、また研究は、対象に密着した現地調査と文献研究に基づき分析も堅実で、博士論文としての水準に達していることが窺えた。

論文審査及び学力の確認の判定

本学位請求論文は、長期間のフィールドワークによる詳細な観察と聞き取りに基づき、北インドのカスバ（C町）のムスリム社会のヒエラルキーを、預言者につながる「名誉ある血統」の保持者、伝達者とされるサイヤドを中心に据えて分析したもので、従来の「ムスリム・カースト」論とは異なる新たな視点をもって北インド・ムスリム社会を捉えている。本論文は、イスラームの規範としては平等主義的である人々が階層的な社会に生きている状態を記述するのみでなく、そのヒエラルキーをイスラーム的論理自体から解明したものである。手堅い構成と分析でまとめたこの民族誌は、北インド・ムスリム社会研究、さらには、世界におけるムスリム地域社会研究にも、一石を投じるものと評価される。

本論文に関しては、困難な仕事かもしれないが、調査対象のムスリムの人々が抱く自己のイメージの変化をもっと追求したらよかったとの意見や、記述に羅列的なところがあり読みにくい部分があるとの批判もあったが、対象に密着したしっかりした調査に基づく記述と、明確な目的をもった分析により、本論文が博士論文の水準を越えるとの点については異論がなく、全員一致で、博士（学術）を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

以上